# じいちゃんからの宿題

越前市坂口地区　【提供：越前市エコビレッジ交流センター】

「魚つりに行くか。」

というじいちゃんの誘いに、

「やったー。」

と、ガッツポーズでこたえた。谷川での魚つりは、一年ぶりだ。

毎年夏休みは、弟と二人で、福井県のじいちゃんの家で一週間過ごすことになっている。この村は、里山と言われているところで、たな田の風景が広がっている。

谷川まで行く山道は人一人がやっと通れるはばで歩きにくかったが、木々がしげっているせいで、町では猛暑だと騒いでいるのにずいぶんとすずしい。木々を通りぬけてくる風は、緑のにおいがしてすがすがしい。ぼくたちの腰にぶらさげたクマ鈴がにぎやかな音を立て、セミの声と競っている。

「ほしたら、つりざおを選んでやるな。」　※ほしたら…そうしたら

じいちゃんは竹林のところで、立ち止まると、ぼくらがにぎるのにちょうどよ

い竹を選んで、切り出してくれた。糸と針をつければ、つりざおのできあがりだ。ぼくは、

「じいちゃん、えさはこれだよね。」

と言って、ミミズを見つけて針につけた。実をいうと、ぼくはミミズが大の苦手だ。でも、今日は、弟にいいところを見せなければならない手前、泣き言を言ってはいられない。

「あとは、川の中に糸をたらせば、魚がつれるぞ。」

と、ぼくははり切って糸を投げこんだ。ものの数分もたたないうちに反応があった。つれたのはウグイだ。

出典：独立行政法人 情報処理推進機構(IPA)

「すごい。今年も、いっぱいつれそうだ。やってみろ。」

と、今年初めて、魚つりについてきた弟に、ちょっとえらそうに言ってみた。

「わあ、ぼくでもつれる。」

と弟は大はしゃぎだ。ウグイを針から外すのも、じいちゃんを見様見真似でまねてみるのだが、魚がはねるので、なかなか難しい。それでも、何とか針を外すことができた。弟は、

福井県里山里海湖研究所

「魚がぬるぬるして気持ち悪い。」
と言って、魚にさわれもしない。ぼくは、頼りがいのあるところを見せることができていい気分だ。
二十匹つったところで、今日のつりはおしまいということになり、食べる分の五匹だけをバケツに残して、後は川にもどすことにした。こんなに魚がつれるとは、思ってもいなかった。自然の恵みに思わず顔がほころんだ。
帰りの山道でじいちゃんはこんな話をしてくれた。
「この辺の山の木は、鳥やけもの、それと風が種をまいてくれるんや。雨が多いせいで、人間が手をかけんでも木がどんどん育っていく。大事なのは、よけいな木をまびいて、すきまをあけてやることや。昔は人間がいらん木を切ってたで、山はいつもかも、生まれ変わっていたんや。ほやけど、山の仕事がすたれて、木を切らんようになってもたで、山の木が、きゅうくつになってもた。山は、人間が手入れをすることで守られてきたんやでの。手入れをせんと、大木ばっかになって、山に住むけものが食べる木の実をつける背の低い木に光が当たらんで、生えんようになってまう。そしたら、野生のけものは生きていけんようになるわ。野生のけものが消えたら、そのうち、山の木もあかんようになってまうんやろな。ほしたら、人間が生きる場所ものうなってまうかもしれん…。」
その話を聞きながら、ぼくは、先生がクマやイノシシの食べ物がなくて、里におりてきては、問題になってい

ると話してくれたことを思い出した。

「ここも、もうしばらくで、ないようになってまうんかもしれんの。」

とつぶやくじいちゃんのさびしそうな横顔を見ていたら、ぼくは、思わず大きな声で力を込めて言った。

「だれかが手入れをすればいいんや。そうすれば、里山はなくならん。ここもなくならん。」

「だれかがって、だれや。」

と言うじいちゃんの声にはっとした。

「それは…。」

（ぼくがやる。）という言葉を飲みこんだぼくにじいちゃんが、またつぶやいた。

「日本中から里山がどんどん消えていくんや。そやけど年寄りには、もう時間がない。」

（ぼく一人では、とても里山を守っていくことはできない。）

魚つりを楽しんだ谷川や美しいたな田の風景が、『じいちゃんからの宿題をどうするの』と、ぼくにうったえかけていた。

福井県里山里海湖研究所

- 里山からの自然の恵みを感じたことがありますか。
- 里山を守るために、一人一人ができること何か話し合ってみましょう。